経済論叢（京都大学）第184巻第4号，2010年10月

〈特集　マルクス派最適成長論の展開と周辺問題〉

「前貸経済学」としての “Temporal Single System Interpretation”
――学説史的視点からの一評価――

森　本　壮　亮

Ⅰ　はじめに

本稿は，1990年代以降の欧米マルクス経済学において一大勢力を得たといえる“Temporal Single System Interpretation”（以後，TSSIと略記することとする）[1] について検討する。欧米では1970年代に「転形問題」論争に一定の決着がついて以降もそれまでとはまた異なった形で論争が続いており，その中で現在に至るまで，「転形問題」の単なる「解法」以上の意味をもついくつかの新しい価値論解釈が生まれている。

しかしながらこれら近年の欧米マルクス経済学の議論は，我が国ではまだあまり十分には知られていないのが現状である。それは，(1)価値から（生産）価格への転形をめぐる転形問題論争が1970年代に一定の決着がついたように見えることから，以後我が国のマルクス経済学の大方の関心は価値論とは別の方向に向いてしまって現在に至っていること，(2)特に本稿で検討するような欧米マルクス経済学における近年の議論は“NI”や“SSSI”や“TSSI”などといった一見神秘的な言葉が飛び交っていて別世界の事柄であるかのような印象を受けること，などの理由があると思われる。

だが，この欧米マルクス経済学における価値論に関する議論は，経済危機などの問題に対する彼らの実証分析の基礎をなしているものであり，この部分に関する理解なくしては多くの彼らの興味深い実証分析を理解することはできない。また，マルクス経済学の理論史の視点から見ても，彼らの議論は70年代までの議論に対するある種のアンチテーゼとして生まれてきており，20世紀のマルクス経済学の歴史を整理し21世紀のマルクス経済学を展望する上で非常に有用なものと思われる。そしてさらにはこの議論の中では，置塩信雄や森嶋通夫などといった我が国の経済学者達に対する批判も非常に重要な位置を占めており，あたかも対岸の火事であるかのように無視することはできないという事情もある。

そのような欧米マルクス経済学における価値論に関する議論の中でも本稿で特にTSSIを取り上げる理由は，TSSIが従来の1970年代までの転形問題論争における解釈から最も遠い価値論解釈である点，そしてまたTSSIに1980年代以降の欧米マルクス経済学の流れが最もよく現れていると思われるからである。加えて，我が国においてTSSIを取り上げた研究はこれまでにも，東［2000］，和田［2003］，秋保［2004］，Nakatani［2005］などいくつか存在するが，TSSIそのものを体系立って十分に説明したものは私見の限りまだ存在しておらず，またほとんどの場合において転形問題の一解法としてし

1）TSSIは我が国では特に東［2000］以降「時間的単一体系」と呼ばれることが多いが，まだ十分に認知された呼称であるとはいえず，また転形問題の一解法というイメージもつきまとうため，より広い視点からこれを検討する本稿では単純にTSSIという呼称を採用した。

かTSSIが捉えられていないため，その意義を捉え損なってしまっているように思われるからである。

それゆえ本稿では，これまでの国内外の諸研究のように転形問題の一解法という狭い枠組みの視野だけから見るのではなく，より広く経済学説史的な視点から，TSSIとは一体何であるのかを理解し，その上でその意義と問題点，そしてこれからの課題を明らかにすることを目標とする。そのためにまずTSSIが出現する土壌となった1970年代までの学界の理論的状況を整理し（第Ⅱ節），そのような状況からなぜ，どのように，そしてどのような人々によってTSSIが出現させられたのかをみてみる（第Ⅲ節）。そして出現したTSSIはいかなる理論的特徴を有しているのかをまとめ（第Ⅳ節），そのような理論的特徴をもったTSSIは結果的にどのような理論となっているのかを，その意義と同時に問題点と課題も析出することで，TSSIをはじめとする価値論が今後どのように深められる必要があるか，現段階における課題を何点か明らかにしてみたい（第Ⅴ節）。

Ⅱ　TSSIの出現までの学界の理論的状況

周知のように，マルクスの死後の1885年に『資本論』第2巻が出版されて以降，価値から価格をマルクスはどのように導き出したかを当て合う「懸賞論文競争」が展開された。1894年に『資本論』第3巻がエンゲルスの手によって出版され，マルクスの解法が明らかになって以後も，このマルクスの解法に納得しない者が多く現れ，以後「転形問題論争」として20世紀を通して学界で広く議論されることとなった。この20世紀の転形問題論争における帰結をごく簡単にまとめると，次のようになる。

まず『資本論』第1巻レベルでの価値論は，商品の価値は，生産手段に体化されている労働と直接労働との和によって決まるとするものであり，各商品の価値ベクトル $\boldsymbol{t}=(t_1, \ldots, t_n)$ は，生産手段の投入係数行列を A，直接労働ベクトルを $\boldsymbol{l}$ とすると，

$$\boldsymbol{t}=\boldsymbol{t}A+\boldsymbol{l} \tag{1}$$

のような式で表すことができる。この式の右辺の第一項 $\boldsymbol{t}A$ は不変資本 $\boldsymbol{c}=(c_1, \ldots, c_n)$ の価値を表している。第二項 $\boldsymbol{l}$（生きた労働）は，労働者に支払われる可変資本 $\boldsymbol{v}=(v_1, \ldots, v_n)$ と，資本家の取り分となる剰余価値 $\boldsymbol{m}=(m_1, \ldots, m_n)$ とに分かれ，労働者の実質賃金ベクトルを $\boldsymbol{b}=(b_1, \ldots, b_n)'$ とすると両者はそれぞれ

$$\boldsymbol{v}=\boldsymbol{tbl} \tag{2}$$

$$\boldsymbol{m}=\boldsymbol{l}-\boldsymbol{tbl} \tag{3}$$

となる。

これに対し，『資本論』第3巻でマルクスは，資本家間の競争によって剰余価値部分の再分配が行われ，各投下資本あたりの利潤率は平均化されると論じた。すなわち各投下資本あたりの利潤率 r^* は，$\boldsymbol{x}$ を商品の生産量ベクトルとすれば，

$$r^*=\frac{\boldsymbol{mx}}{\boldsymbol{cx}+\boldsymbol{vx}} \tag{4}$$

のように決まり，商品の生産価格はこのような平均利潤率をもたらすような大きさで決まるとマルクスは論じた。するとこのような生産価格 $\boldsymbol{p}^*$ は

$$\boldsymbol{p}^*=(1+r^*)(\boldsymbol{c}+\boldsymbol{v})=(1+r^*)(\boldsymbol{t}A+\boldsymbol{tbl}) \tag{5}$$

のようになる。しかしこの式では，生産手段や実質賃金として消費される商品の価値はそれぞれ $\boldsymbol{t}A$ と $\boldsymbol{tbl}$ と，生産価格となっていない。そしてマルクスも『資本論』第3巻で以上のような転形手続きについて説明した後，次のような指摘をしている。

> 「以上に述べたことによって，商品の費用価格の規定については明らかに一つの修正がはいってきている。最初は，商品の費用価格はその商品の生産に消費される諸商品の価値に等しいと仮定した。ところが，

商品の生産価格は，その商品の買い手にとっては費用価格であり，したがって費用価格として別の商品の価格形成にはいることがありうる。生産価格は商品の価値と一致しないこともありうるのだから，ある商品の費用価格のうちに他の商品のこのような生産価格が含まれている場合にはこの費用価格も，その商品の総価値のうちその商品にはいる生産手段の価値によって形成される部分よりも大きいかまたは小さいことがありうる。そこで，費用価格のこのような修正された意味を頭に入れておくことが必要であり，したがって，ある特殊な生産部面で商品の費用価格がその商品の生産に消費される生産手段の価値に等しいとされる場合には，いつでも誤りが起こりうるということを注意しておくことが必要である。」（[1964] S. 174，邦訳第6分冊，275-276ページ。強調は原文。）

このマルクスの指摘を拠り所として，「費用価格」部分の $\boldsymbol{tA}$ と $\boldsymbol{tbl}$ とを生産価格に「修正」する必要が繰り返し強調され，この「修正」をした後には，マルクスが強調する総計一致二命題（総価値＝総価格，総剰余価値＝総利潤）は，資本の有機的構成が全産業で均一などの非常に特殊な条件下でしか同時には成立しないということが明らかにされた[2]。

また，I. Steedman は，一つの生産過程から同時に複数の商品が生産されるような結合生産が行われる場合には，マルクスのように投下された労働を加算して価値の大きさを規定する場合には，負の剰余価値のもとで正の利潤が存在するという場合がありうることを指摘した［1975］。これは明らかに「利潤が存在するための条件は剰余労働が存在することである」[3]という「マルクスの基本定理」を否定するものであり，先の総計一致二命題の同時不成立の問題と同様，学界に大きな衝撃を与えた。

さらに，同時期にかなりの共通項をもちながら発展させられていったリカード経済学は，たとえばP. スラッファが『商品による商品の生産』で示したように，社会における生産技術と実質賃金がわかっていれば，生産に関する連立方程式を解くことで，諸商品の相対価格と利潤率が同時に得られるということを明らかにした。すなわち，前述のマルクスのように価値論から出発しなくても，各商品の価格ベクトルを $\boldsymbol{p}=(p_1, \ldots, p_n)$ とすると，連立方程式[4]

$$\boldsymbol{p}=(1+r)(\boldsymbol{p}A+\boldsymbol{pbl}) \tag{6}$$

は，未知数がn＋1個で方程式はn個だが，相対価格と利潤率 r を決定することができる[5]。このことから，「転形問題」やその他結合生産における価値決定などの問題を抱えた価値論から出発する余計な「回り道」をとらなくても価格を決定することができるということが強調さ

2）このことはボルトキエヴィッチ以降繰り返し唱えられてきたが，Morishima［1973］にその頂点を迎えた。

3）置塩［1977］127ページ。

4）スラッファ自身は，不変資本部分のみに利潤率rをかけている。これは賃金は生産が終わった後に生産物の中から後払いされるということを意味しており，スラッファ自身も書いている通り，賃金は前貸されるという古典派経済学者の慣習とは異なっている。なお，スラッファの草稿に関する近年の研究によると，このように後払いに変えたのは計算の簡単化のためだったらしい（Gilibert［2003］p. 38；［2006］p. 44）。

5）また置塩［1977］は，「費用価格」部分を利潤率が均等になるまで生産価格化した場合の解が，このような連立方程式の場合と同じものに収束することを示した（第4章第1節）。しかし，価値論抜きで価格方程式だけから価格を導けば十分であるとする柴田敬によるサミュエルソンやSteedmanの議論の先駆となっている議論には賛成できない旨注意を与えており（207ページ），その後も一貫して価値論の放棄には反対した。

れ[6]，またマルクスが価値論で論じた資本家による労働者の搾取に関しても，スラッファが利潤と賃金との対抗関係を明らかにし（[1960] p. 22，邦訳36ページ），森嶋が価値論抜きで「マルクスの基本定理」を証明した［1974］ことから，搾取論にも価値論は必ずしも必要でないことが明らかにされた。

このような1970年代までの議論の流れの中で，Steedmanは，資本主義社会の唯物論的説明にとってマルクスの価値論は「大きな足かせ（major fetter）」であると結論づけたのであった（[1977] p. 207）。

また価値論や搾取論以外においても，たとえばマルクスの「利潤率の傾向的低下の法則」に対して，Okishio［1961］が「もし，消費財で測った実質賃金率が一定であることを仮定して，現行の価格と賃金率で測って単位費用を引き下げるような新しい技術が基礎部門に導入されるとするならば，新しい均衡が成立したとき均等利潤率は必ず上昇する」[7]という強力な反論を行った（いわゆる「置塩定理」）。

Ⅲ　TSSIの出現

以上のような議論に対し，マルクス経済学の陣営内外から多くの反論が提出されたのも事実である。代表的なものとしては，Armstrong, Glyn, Harrison［1978］やSen［1978］などがあり，また置塩［1977］もSteedmanや森嶋の議論に対する批判をしている（第3章および第5章）。

しかし大学院レベルの教育の場では，論争に参加していた教員達によって，たとえばSweezy［1942］をテキストにしながら，以上のような議論がマルクス経済学の講義で教えられていた。これに対し，マルクスに惹かれてその授業に参加した学生や活動家が，『資本論』との距離に衝撃を受けたであろうことは想像に難くない。少なくとも，マルクスの議論の根幹である総計一致二命題や価値論に基づく搾取論の否定などは，たとえ論争に参加していた教員達がマルクスに大きな影響を受けていたとしても，非論争当事者から見れば，マルクスの理論の否定にしか見えなかったであろう。1980年代以降の価値論の各種の新解釈は，そのような70年代までの論争の当事者からは比較的距離のある者によって押し進められていった。その中の一つがTSSIであるが，TSSIの主唱者の一人であるA. Klimanは，彼の研究の出発点を次のように綴っている。

> この書（Kliman［2007］―引用者）に結実している私の個人的な旅の出発点は，20年前自分がユタ大学で経済学を学んでいた時であった。進学資格試験（comprehensive exam）に向けて勉強をしていた友人でもあり博士課程の学友であったTed McGloneが，価値から生産価格への転形に関するマルクスの説明がなぜ内在的に矛盾しているのか説明するよう私に頼んできた。彼は我々の教授達の説明を聞いていたが，それでもマルクスの説明のどこが間違っているのか彼には理解できなかった。私は「マルクスは投入価格を転形し忘れた」という我々が教わった通りのことを忠実に繰り返してみたが，自分もその理由を満足に説明できないことに気づいた。だから私は彼に，我々の教授などのマルクス経済学者も含めて皆マルクスは間違っていたということで結果的に意見が一致しているとい

6）このことは，SteedmanやHodgsonといったスラッフィアン右派以前にも，サミュエルソンなどといった新古典派経済学の文献でも繰り返し主張されていた。なお，労働価値説は不要な「回り道（detour）」だという論をはじめに学界に広めたのはSamuelson（[1957] p. 911ページ）であるように思われる。

7）置塩［2004］187ページ。

う事実をただ受け入れるように勧め，間違いはマルクス以降修正されたのだからどうでもよいことだと指摘した。…… しかし彼はその後も数週間質問し続け，自分も矛盾の主張を擁護することができなかった。このことは結局私に一次資料，すなわちボルトキエヴィッチの『マルクス体系における価値と価格』[1952] におけるマルクスの内在的矛盾の証明の再検討をさせることとなった。しかししばらく調べるうちに，自分が思っていたことが間違っていたかもしれないということに気づいた。…… そしてボルトキエヴィッチの証明に対する反論を作成し ……（その後―引用者）McGlone と私はその反論のインプリケーションを考えることで，TSSI として知られるようになったものを考案した。([2007] p. xiv，強調は原文)

また，TSSI のもう一人の主唱者である A. Freeman も，1970 年代までの学界の論争からは距離のある環境の中でマルクスの議論を学んだ人間の一人である。彼は元々は数学やコンピューターが専門で，政治的活動の中でマルクスを読んでいたといい，本格的にマルクスを学び始めたのは 1976 年にロンドン大学を構成するうちの一つ Birkbeck の大学院に入学してからのようである[8]。当時の Birkbeck では，たとえば B. Fine など転形問題論争に参加していた教員が多くおり，彼らから多くを学んだようであるが，Kliman と同様，マルクスを本格的に学ぼうとしていたときには，「マルクス経済学」は『資本論』からは遠く離れたものとなっていたのであり，そのような学界の状況にすぐに疑問を抱くようになったであろうことは容易に想像できる。そのような中で独自にマルクスの動学的なシミュレーションモデルを作っていたそうであるが，本格的な出発点となったのは，E. Mandel に誘われて Mandel and Freeman (eds.) [1984] に結実するプロジェクトに参加したことであったようである。

しかし TSSI は，たとえばスラッファ経済学のように同一の場所で出現したものではない。その事情は Kliman が先の引用部分の直後で書いているように，彼らが TSSI を考案する「数年前にすでに他の幾人かの研究者がすでに独立に同じものを発見していた」[9] のであり，1980 年代前半頃に上述のような学界状況のもとで，70 年代までの論争の当事者からは比較的距離のある者達によって，自然発生的に独立に出現したと言って間違いない。事実，TSSI の二人の主唱者の Kliman と Freeman は，Freeman が P. Giussani に似たような発想の論文を書いている者がいると知らされるまで，全く互いのことを知らなかったようである。

そしてこのように自然発生的に独立に出現した TSSI の初期の文献としては，転形問題論争とその中での価値論解釈を批判的に検討した上記の Mandel and Freeman (eds.) [1984] や Carchedi [1984] や Kliman and McGlone [1988]，利潤率の傾向的低下に関する置塩定理を批判した Ernst [1982] や Kliman [1988] などがある[10]。その後論文を通じて互いに知り合いまとまるようになり，1996 年にはついに 1 冊の著作 Freeman and Carchedi (eds.) [1996] を出版し，その後も TSSI に関する論争の論文

8）A. Freeman に関する情報に関しては，本人からの直接の情報提供による。本人の了解のもと，ここに掲載する。

9）Kliman [2007] p. xiv.

10）日本における TSSI についての草分け的研究である東 [2000] においては，「Callari, A. & Roberts, B. [1982] らによって初めて提起されたものである」(p. 64) と紹介されているが，たとえば Kliman ([2007] p. 39) のように，一般的には彼らは “Simultaneous Single System Interpretation (SSSI)” に分類されることが多い。

集 Freeman, Kliman, and Wells（eds.）［2004］や Kliman［2007］といった著作の他，数多くの論文が現在まで公刊されてきている。

Ⅳ　TSSI の理論的特徴

TSSI に関しては和田［2003］が「流行」と表現しているように（233 ページ），特に Freeman and Carchedi（eds.）［1996］が出版されて以降は，現在まで関連雑誌に数多くの論文が掲載されてきており，少なくとも欧米マルクス経済学においては一大勢力を得るに至ったといえる。ただ，上述のようにそれぞれ独立して出現した事情があるため，東［2000］も指摘しているように必ずしも完全な統一見解があるわけではないし（63 ページ），Freeman and Carchedi（eds.）［1996］でさえも体系的な TSSI の著作とまでは言い難い。しかし “TSSI” という用語でまとめて論じられることが多いように共通項が多いこともまた事実である。以下ではこの共通項と思われる部分をまとめることにより，TSSI とはどのようなものなのか，その輪郭を浮かび上がらせることにしたい。

1　従来の「マルクス経済学」やスラッファ経済学の拒否

前節で見たように，TSSI は 1970 年代までの論争からは比較的距離のある非当事者もしくはその次の世代の研究者によって押し進められてきており，そもそもの出発点がそれまでのマルクス経済学への疑問であるため，転形問題論争などにおける従来型のマルクス解釈を共通して強く拒否するところに，第一の特徴がある。それゆえ，スティーマンなどによる価値論抜きの「資本主義社会の唯物論的説明」は唯物論などではなく “physicalism” にすぎないと強く批判するのである（Kliman［2007］Ch. 5）。

2　「Whig 的歴史観」の拒否

この背後にあるのは，現在支配的な立場から見た現在は過去よりも必然的に勝っているという「Whig 的歴史観」の否定である。たとえば Blaug［1999］のように，ある過去の人物の理論の解釈が実は現在の理論から見た解釈でその過去の人物その人の理論からはかけ離れてしまっているのではないか，という疑問が理論史において出されることはしばしばあるが，TSSI も同様の批判を従来のマルクス解釈に投げかけている（Kliman［2007］pp. 9–13）。

3　マルクスの著作への回帰

そして彼らは，マルクスの著作そのものにもう一度立ち戻ることを主張する。個人的な話になるが，2010 年度の世界政治経済学会（WAPE）で Freeman 他数人と議論していた際に，Freeman が「マルクス経済学には二つの種類がある。一つはマルクスは何を言っていたかを追求するもの。もう一つは，マルクスの理論を用いて新たな経済学を追求しようとするもの。しかし重要なのは，前者だと思う」と主張していた[11]。この Freeman の言にも象徴されているように，彼らの基本的スタンスはマルクス自身の著作に立ち戻ることにある[12]。

その意味においては，和田（［2003］233 ページ）の「偉大な先達たちの到達点を認識しない

11）偶然にも同学会の別の場所で，転形問題論争にも参加し現在は TSSI への批判的論客の一人となっている D. Laibman と話していた際に，同様の区別を彼が言い出し，「我々にとって重要なのはマルクスの議論の良い部分を取り出して我々の経済学を作ることだ」と主張した。この両者の態度の違いは，両者の理論の違いにも大きく繋がっているように思われる。

12）たとえば Freeman［1996a］は，転形問題論争などで用いられてきた従来型の定式から議論を始めるのではなく，「純朴な視点（naïve view）」による定式化から議論を始めている。

ままに，あるいは認識できないままに，真の問題解決からかけ離れた安易な思いつきや過去の理論の矮小な焼き直しが窘められることなくまかり通る状況が，マルクス派経済学の学界ではいまや全世界的に現出しているのではないだろうか。近年の流行である『時間的単一体系（TSSI―引用者）』の議論も，われわれには研究の発展ではなく停滞と混迷の象徴であるようにしかみえない」という指摘は，ある意味では全く的を射た指摘である。

しかしながら，彼らは「偉大な先達たちの到達点を認識しないままに，あるいは認識できないままに」「安易な思いつき」に走っているというのは早計であるように思われる。彼らの強力なエネルギーの源は，転形問題論争などの帰結を教えている教壇ではなく，常にマルクスの著作そのものから出発しようとするところにある。それゆえ，従来型の視点から見れば奇妙にしか思えないような主張も多くあるが，それらはいずれも何らかのマルクスの記述の裏づけをもっており，必ずしもマルクスからかけ離れたものであるとはいえない。

4　Single System（価値論と価格論の統一的把握）

このようにマルクス自身の著作に立ち戻った際に再発見するのは，マルクスは『資本論』等の著作の中で価値を多くの場合時間ではなくポンドなどの貨幣表示で記していることである。20 世紀の転形問題論争では，価値方程式と価格方程式とが別々に立てられ，両者の間をどのように架橋するかが主な争点であったし，この点についての疑問はほとんど提出されなかったと言っても過言ではないだろう。そして価値と価格の「次元の相違論」もある程度の支持を集めた。しかし先にも見たように論争の過程で総計一致二命題が否定され，価値論が価格決定や搾取の存在証明には必ずしも必要ではないということになると，価値論の役割はせいぜい商品交換の下に隠された人間関係の「叙述」でしかないということになる[13)]。すると『資本論』の，第１巻の商品論から始まって第３巻で生産価格が説明され，そして最後に商品価値に関する「三位一体的定式」の否定で終わる議論は一体何であったのかという疑問を多くの者が抱いたのは想像に難くない。このように論争の中で失われてしまった，マルクス自身にとっては議論の中心であった価格論を甦らせようとするのが，1980 年代以降の諸々の「新解釈」の特徴である。

そのような価値論＝価格論の甦生方法は，G. Duménil［1983］や D. Foley［1982，1986］などの “New Interpretation（NI）” や，Wolff, et al.［1982，1984］や Moseley［1993a］らの “Simultaneous Single System Interpretation（SSSI）” や，TSSI とではそれぞれ異なっており，そこにそれぞれの主な違いがあるが，その違いにもかかわらず共通しているのは，従来のように価値論と価格論とを二つの独立した体系（“Dual System”）と解釈するのではなく，価値論を価格論に還元もしくは統一することによって，マルクスの価値論＝価格論を実証可能なものとし，現実経済の分析に適用することにある。

5　資本の循環への注目

そこで問題となるのは，価値論と価格論との統一の方法である。その際 TSSI をはじめとする諸新解釈が注目するのは，マルクスが『資本論』第２巻第１篇で考察を行っている資本の循環である。資本の循環には貨幣資本の循環，生産資本の循環，商品資本の循環の三側面があるが，そのうち貨幣資本の循環に注目してみると，資本の貨幣形態を M，商品形態を C，生産資本形態を P とすると，周知の通り

$$M-C\ldots P\ldots C'-M'$$

という定式で表すことができる（ただしダッ

13）このしかし重要な役割を強調したのは，Sen［1978］である。

シュ「’」は元のMやCとは異なった大きさであることを表す)。

6　Temporal（時間概念の導入）

この循環定式に注目して価値論を価格論に還元もしくは統一するのが諸新解釈の共通した特徴であるが，TSSIはこの定式の中に時間の経過を見るところに特徴がある。すなわち，生産には時間がかかるので，はじめのM－Cと生産を経たC’－M’とは期が異なっていると見るのである。それゆえ，もし生産が一期であるならば，この循環定式は

$$M_t - C_t \ldots P \ldots C'_{t+1} - M'_{t+1}$$

のように表すことができる。そしてこのような「時間の経過を表現した」循環定式を拠り所として，マルクスの転形手続きは時間の経過に沿った（chronological）因果の手続きであるとTSSIは主張する[14]。そして生産過程で用いられる不変資本と可変資本の価値は，生産に投下される前貸資本の大きさ（上の循環定式の最初のM）によって，生産が行われる以前にすでに与えられているので，「費用価格」部分の生産価格への転形は「必要なかった」という主張が出てくる[15]。

それではいつ価値は「価格」に転化するというのだろうか？　Freeman［1996a］によると，それは『資本論』第1巻レベルにおいてすでに与えられているという[16]。すなわち『資本論』第1巻でマルクスは，商品の価値とは（抽象的）人間労働が体化・結晶したものであり，価格とは投下した労働を供給者が観念的な金の分量によって示したもの，交換価値とは実際にその商品が他の商品と交換される割合であるという規定を行っていたが，このことからも明らかなように，生産のために購買される商品としての不変資本や可変資本はすでに価格という形態を帯びている。それゆえこの説明を行って以降マルクスは商品の「価値」をポンドなどの貨幣表示でその大きさを表しているのであるが，TSSIはこの点を重視し，『資本論』第3巻の「費用価格」は価値ではなくすでに「価格」であると解釈している[17]。

7　Monetary Expression of Labor Time（MELT）

このような『資本論』第1巻レベルでの価値から「価格」への「転化」における両者の比率は，“Monetary Expression of Labor Time（MELT）”と呼ばれる。このMELTはTSSIが明示的にこの概念を主張する前からNIが提唱していた概念であり，NIはMELTを現在価格で測った純国内生産とその期に支出された生きた生産的労働との比率として定義していた[18]。このようなNIのMELTに対し，TSSI

14）Freeman［1996a］p. 16. 他の解釈も同様にマルクスの循環定式を鍵として，価値論を価格論に還元もしくは統一しようとしているが，たとえばMoseleyは，自らの解釈（SSSI，ただし彼自身は自らの解釈を“‘macro-monetary’ interpretation”と呼んでいる）とFoleyの解釈（NI）とは，マルクスの循環定式を鍵として価値論を価格論に統一しているところに共通点があると主張している（［2000］pp. 305-306）。

15）Freeman［1996a］p. 10. SSSIのMoseley［2000］も，資本の循環に注目して同様に「費用価格」部分の生産価格への転形は必要なかったと主張している（pp. 290-292, 297-305）。

16）同上。

17）和田［2003］は「『資本論』の叙述では，個々の商品の価値（労働価値）をポンドで表すことや生産価格を労働時間に変換することが無条件に可能であるような印象を受けるが，この点がのちの転形問題論争に与えたマイナスは大きい」と指摘しており（235ページ），先の引用部分（233ページ）と合わせて考えてみると，TSSIなどの“Single System Interpretation”もこのマイナスの一部であるかのような印象を受けるが，この点は和田の指摘とは裏腹に非常にクリティカルな問題であるように思われる。

18）Foley［2000］p. 21.

は生産期間中に MELT が変化する可能性を考慮し，生産の期首の MELT と期後の MELT とを区別している点に特徴がある[19]。

8　貨幣の役割の重視

また，交換を通じて個別価値を価格へと「転化」させる貨幣の役割を TSSI は重要視する[20]。1970 年代までの論争における従来のマルクス解釈では，貨幣の役割はほとんど考慮されてこなかったか比較的軽視されてきた。しかしケインズよりもはるか以前にマルクスは『経済学批判』や『資本論』第 1 巻で貨幣の非中立的な独自の役割を考察していたのであり，その意味ではマルクスの理論も「貨幣経済学」といえるかもしれない。“single system” な TSSI の価値論はその展開を容易にし，また “temporal” であることによって恐慌の発生の説明などを容易にしているように思われる。

9　利潤率の傾向的低下法則に関する置塩定理批判

以上のようにして価格論となって甦生された価値論は，いくつかの重要な帰結をもたらす。そのうちの一つが，利潤率の傾向的低下論に対するものである。TSSI はその黎明期から，Ernst［1982］や Kliman［1988］などが利潤率の傾向的低下を否定する置塩定理を継続的に批判してきた。その議論のポイントは，従来の 1970 年代までの価値論解釈で規定した生産技術によって与えられる利潤率（“physicalist rate of profit”）と，TSSI のように費用価格部分を所与として規定した実際の利潤率とは異なったものとなるということである。

たとえば先の (6) 式のような生産技術を記述した連立方程式によって利潤率を計算する場合，方程式が連立（同時化）されることによって，投入部分の価格の大きさは産出時の基準によって評価されざるを得ない。するともし生産期間中にコストを低下させるような技術進歩が起こり，産出時の基準で評価した投入価格が実際に投入した価格よりも低くなる場合は，“physicalist rate of profit” は実際の利潤率よりも高くなってしまうことになる。それゆえ，“physicalist rate of profit” で利潤率の動きを検討し，資本主義経済において利潤率はマルクスが論じたように傾向的に低下しないと論じた置塩定理は，想定からしてマルクスに沿っていないため，「マルクスの利潤率の傾向的低下の法則は論理的に誤っているということを置塩定理は証明し得ていない」[21] と，置塩定理を批判している。

このような置塩定理批判の背後には，上述のようなマルクス経済学の学界状況に対する反発に加えて，現実経済に対する実証分析においてマルクスが論じたように長期的に傾向的に低下しているということを示しているものが多くあるという事情がある。特に先にも述べたように 80 年代以降実証研究が欧米マルクス経済学において盛んになってきたが，TSSI の枠組みの中でのこのような実証研究には Kliman［2010］がある。その中で Kliman は，TSSI の枠組みで計算したアメリカ利潤率は，1950 年代以降低下傾向にあることを示している（Ch. 3）。

Ⅴ　TSSI の評価と論点

1　「前貸経済学」としての TSSI

それでは，以上のような TSSI は，いかなるものであると評価できるだろうか？　これまで我が国の研究も含めて，TSSI は転形問題の「解法」として議論されてくることが多かった。こ

19）たとえば，Kliman（［2007］p.185）など。ただし MELT に関しては，TSSI を主張する論者の中でも見解の統一はまだ得られていないようである。

20）たとえば，Naples［1996］など。

21）Kliman［2007］p. 118.

れはもちろん間違ってはいないが，前述のようにTSSIは1970年代までの転形問題論争とは距離のある研究者達によって押し進められてきており，転形問題の「解法」というよりも，むしろ学界におけるマルクス再解釈運動と位置づけた方がよいように思われる[22]。事実，TSSIの論者達は機会あるごとに転形「問題」など存在しないと主張してきており[23]，費用価格部分を生産価格化する流れを作ったボルトキエヴィッチの“correction”を強く批判している[24]。そして彼らはボルトキエヴィッチ以前のマルクス解釈に戻ることを主張するのであるが[25]，これを経済学説史的視点から見る際に有用なのは，シュンペーターによる二種類の経済分析様式の区別である。

シュンペーターは『経済分析の歴史』で二種類の経済学の分析的様式を区別した[26]。一つ目はフィジオクラットや古典派経済学などのように「何ものであれ消費されるものは，すでにそれ以前に生産されていなければならないとか，あるいは社会はいかなる時でもつねに過去の上に生き将来のために働くとか，あるいは最後に，最初のストックはつねにわれわれがそこから出発しなければならない与件であるとか，といったような平凡な事実……を分析の中軸たらしめる」分析的様式であり，シュンペーターはこの分析的様式を「前貸経済学（advance economics）」[27]と呼んだ。これに対し，「ひとたび定常過程が成立してしまうと，消費財の流れも生産財の流れも生産用役の流れもともに同時化され，そのために社会があたかもその時々の生産によって生活しているかのように，過程が動いていくから」「定常過程において社会がある一定時に消費しているものがその期ではなく過去の生産の結果であるという事実に対して，何の基本的な役割も賦与しないすべての分析様式」には，「同時化経済学（synchronization economics）」という名前を与えた。

このようなシュンペーターの区別を用いれば，TSSIは明らかに「前貸経済学」としてのマルクス解釈といえる。対して，再生産表式風の連立方程式体系で投入部分を「同時化」して評価する従来型の（ワルラス的）マルクス解釈は，「同時化経済学」といえるだろう。TSSIはことあるごとにボルトキエヴィッチとワルラスとの理論的および個人的親密性を強調しそれを批判するが[28]，これはマルクス経済学の「同時化経済学」からの解放運動であるともいえる[29]。

2　「前貸経済学」としてのTSSIの弱点と論点

だが「前貸経済学」の分析様式を採用した場

22）Foley［2000］は，TSSIだけでなくNIなどの80年代以降の諸新解釈すべてにおいても，転形問題の解法（solution）という用語はあまり適切ではないと指摘している（p. 22）。

23）たとえばKliman［2007］Ch. 9。また同書の副題（“a refutation of the myth of inconsistency”）もそのことを強く意識していることを物語っている。

24）たとえばKliman［2007］p. 157。

25）事実ボルトキエヴィッチ自身も，TSSIの論者達が指摘しているように，マルクスの価値論を「継起主義（successivism）」とTSSIと同様に解釈していた（Freeman［1996a］p. 15；Kliman［2007］pp. 46-47）。

26）Schumpeter［1954］pp. 564-565，邦訳中巻，347-348ページ。以下の引用部分における強調は原文。

27）邦訳は「前払経済学」という訳を与えているが，“advance”という用語は一般的に「前貸」と訳されることが多いため，本稿では「前貸経済学」と呼ぶことにしたい。

28）たとえばFreeman and Carchedi［1996］p. xiii.

29）先に指摘したボルトキエヴィッチ以外にも，シュンペーターも二つの分析様式について区別したこの部分で，マルクスを「前貸経済学」に分類している（［1954］p. 564，邦訳中巻，347ページ）。しかし八木［1982，1984］は，ボルトキエヴィッチ以前にすでにマルクス自身が「同時化経済学」への道を歩いていたと主張している。そして『資本論』第2巻の特に再生産論からアプローチした場合には，確かにこのような解釈も不可能ではない。

合，「多くの帰結がおのずから姿を現してくる」とシュンペーターは指摘する。すなわち「たとえばもしも『資本家』が実際に労働者の実質所得を前払いし，そしてそのことが貨幣的なとり決め以上のものを意味するとすれば，われわれが好むと好まざるとにかかわらず，割引（discounts）と『節欲』（‘abstinence’）とを経済過程の本質的な要件に数えなければならなくなるであろう」といい，このことは「マルクスの理論的構造を覆す一番容易なやり方」であると注をつけている[30]。

従来型のマルクス解釈は実質的に「同時化経済学」となっていたために，このシュンペーターの指摘は従来型のマルクス解釈にはもはやあてはまらなくなっていた。しかし TSSI は時計の針をボルトキエヴィッチ以前に戻し「前貸経済学」としてのマルクス経済学を提唱しているがゆえに，再度この問題に直面せざるを得なくなっている[31]。

そして「前貸経済学」として商品の価値を（現在技術による再生産価値ではなく）過去の労働から導き出そうとする場合，中谷（[1994] 26 ページ）も指摘するように，現在の商品の価値の大きさを知るためには無限に過去の労働投入をさかのぼらなければならない危険性が出てくる。TSSI からすると前貸資本の大きさはすでに所与として与えられているからその心配はないということになると考えられるが，それでは前貸資本の大きさを規定するものは何なのかというさらなる説明をする必要が出てくる上，古典派経済学以前の単純な費用理論に戻ってしまう危険性も出てくる。そのような陥穽に落ちないためには，価値論における労働の役割をより明確にする必要があるだろう。

またマルクスは商品の価値は社会的必要労働によって規定されるとしているが，この「必要」という用語にマルクスは時として「平均」以上の意味を込めて使っている。たとえば Nakatani（[2005] p. 3）も引用して指摘しているように，『資本論』第 3 巻には次のような記述もある。

> 各商品の――したがってまた資本を構成する諸商品の――価値は，その商品そのものに含まれている必要な労働時間によってではなく，その商品の再生産に必要な社会的に必要な労働時間によって制約されている。この再生産は，最初の生産の条件とは違ったより困難な事情のもとで行なわれることも，より容易な事情のもとで行なわれることもありうる。同じ物的資本を再生産するのに，変化した事情のもとでは一般的に二倍の時間かまたは逆に半分の時間が必要になるとすれば，貨幣価値が変わらないかぎり，その資本の価値は，以前は 100 ポンド・スターリングだったとすれば，今では 200 ポンドかまたは 50 ポンドになるであろう。（[1964] S. 150，邦訳第 6 分冊，237-238 ページ，強調は原文）[32]

このことから Nakatani [2005] は「マルクスが考えていたのは現在における標準的技術によって規定される価値であって，過去の技術によるものではない」（p. 5）と指摘し，同様の TSSI 批判を他の多くの論者も展開している[33]。もしこのことが正しく，利潤率を計算する際分母となる費用価格が TSSI の主張するような生産過程以前の過去にすでに規定された前提条件

30）同上書，p. 564，邦訳中巻，348 ページ。同様のマルクス批判は，シュンペーターだけでなくベーム-バヴェルクも展開しており（ベーム-バヴェルク［1969］pp. 81-84），その後も現在に至るまでオーストリア学派の影響を受けた研究者達によって繰り返し唱え続けられている（根岸［1981］第 8 章など）。

31）Sowell（[2006] pp. 182-183）や Hollander（[2008] pp. 256-257）も指摘しているように，この問題はマルクスによってもすでに認識されており，さらにはリカードやマルサス，マカロックなどといった古典派経済学者達が議論した中心論点でもあった。

ではないとするならば，TSSIの置塩定理批判も成立しないことになる。しかし周知のようにマルクスは不変資本を「過去の労働」や「死んだ労働」と随所で呼んでいるのも事実であり，Freeman（[1996a] p. 9）も指摘しているように，『剰余価値学説史』には次のような説明もある。

> 商品の費用価格（生産価格―引用者）と価値との差額は二重にひき起される。一つは，新たな商品の生産過程の前提である商品の費用価格（生産価格―引用者）と価値との差額によって。もう一つは，諸生産条件に現実につけ加えられる剰余価値と，（前貸資本について）計算される利潤との差額によって。しかしながら，不変資本として一商品にはいる商品は，どんな商品も，それ自身，所産として，生産物として，他の生産過程から出てくるものなのである。こうして，商品は，交互に，他の商品の生産にとっての前提として，また，他の商品の定在が自分自身の生産にとっての前提として存在する一過程の所産として，現われる。（Marx［1965-68］S. 167，邦訳第7分冊，300ページ，強調は引用者）

ここで強調をつけた「前提」という言葉を生産以前の「過去」と読めば“temporal”となり，「同時に共存する現在」と読めば“simultaneous”ということになる。言うまでもなく，前者は「前貸経済学」の分析様式であり，後者は「同時化経済学」の分析様式である。いずれの分析様式がよりマルクス解釈として正しいか，またいずれが現実経済の分析に有用であるかが，まさに欧米マルクス経済学の価値論で現在議論になっている中心論点であり，まだ決着がつくまでにはほど遠い状況であるという意味では，この点はTSSIだけでなく価値論全体の今後の課題でもあろう。そしてもしマルクス経済学は「前貸経済学」であるということになれば，シュンペーターの指摘した先の問題に答える必要が出てくるだろう。

付記

本研究は，日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と「アジア・コア」事業の成果の一部である。

参考文献

秋保親成［2004］「マルクス経済学における動態概念の導入――いわゆるTSSアプローチについて」『中央大学大学院研究年報』第34巻，135-151ページ。

東浩一郎［2000］「欧米価値論論争の現状――労働価値説の意義を考える」中央大学経済研究所編『現代資本主義論と労働価値論』中央大学出版部。

置塩信雄［1977］『マルクス経済学――価値と価格の理論』筑摩書房。

――［2004］『経済学と現代の諸問題――置塩信雄のメッセージ』大月書店。

P. M. スウィージー（編）［1969］『論争・マルクス経済学――ベーム＝バウェルク ヒルファディング ボルトキエヴィッチ』玉野井芳郎，石垣博美訳，法政大学出版局。

高増明［2005］「ピエロ・スラッファ――古典派経済学を基礎とした新古典派経済学の批判者」大森郁夫編『経済学の古典的世界２』日本経済評論社，所収。

32）この引用部分の後の同一ページに，マルクスは「もしも前貸資本の貨幣価値だけが（貨幣の価値変動によって）増大または減少するならば，剰余価値の貨幣表現も同じ割合で増大または減少する。利潤率はもとのままで変わらない」と指摘している。このことは，Klimanが「必ずしも必要ではない」指摘と注をつけながらも（[2007] p. 136），価格変動によってひき起される利潤率の影響をとり上げて置塩定理を批判しているのは（[2007] p. 114），あまり適切ではないことを示しているように思われる。

33）商品の価値を規定する場合の不変資本の大きさは，いわゆる置き換え費用（replacement cost）なのか歴史的費用（historical cost）なのかというTSSIについての一大論点の簡単なサーベイとTSSI側の反論としては，Kliman（[2007] Ch. 6）がある。

中谷武［1994］『価値，価格と利潤の経済学』勁草書房。
根岸隆［1981］『古典派経済学と近代経済学』岩波書店。
ベーム－バヴェルク［1969］『マルクス体系の終結』木本幸造訳，未來社。
八木紀一郎［1982］「マルクスにおける資本と時間(I)」『岡山大学経済学会雑誌』第 14 巻第 2 号，211-246 ページ。
――［1984］「マルクスにおける資本と時間(II)」『岡山大学経済学会雑誌』第 16 巻第 2 号，197-225 ページ。
和田豊［2003］『価値の理論』桜井書店。

Armstrong, P., A. Glyn, J. Harrison［1978］“In Defence of Value : A Reply to Ian Steedman,” *Capital and Class*, 5, pp. 1-31.

Blaug, M.［1999］“Misunderstanding Classical Economics : The Sraffian Interpretation of the Surplus Approach,” *History of Political Economy*, 31 : 2, pp. 213-236.

de Vivo, G.［2003］“Sraffa's Path to *Production of Commodities by Means of Commodities*. An Interpretation,” *Contributions to Political Economy*, 22, pp. 1-25.

Carchedi, G.［1984］“The Logic of Prices as Values,” *Economy and Society*, 13 : 4, pp. 431-455.

Duménil, G.［1983］“Beyond the Transformation Riddle : A Labor Theory of Value,” *Science & Society*, 47 : 4, pp. 427-450.

Ernst, J.［1982］“Simultaneous Valuation Extirpated : A Contribution to the Critique of the Neo-Ricardian Concept of Value,” *Review of Radical Political Economics*, 14 : 2, pp. 85-94.

Foley, D.［1982］“The Value of Money, the Value of Labor Power and the Marxian Transformation Problem,” *Review of Radical Political Economics*, 14 : 2, pp. 37-47.

――［1986］*Understanding Capital : Marx's Economic Theory*, Cambridge, Harvard University Press（竹田茂夫・原伸子訳『資本論を理解する――マルクスの経済理論』法政大学出版局，1990 年）。

――［2000］“Recent Developments in the Labor Theory of Value,” *Review of Radical Political Economics*, 32 : 1, pp. 1-39.

Freeman, A.［1996a］“The Psychopathology of Walrasian Marxism.” In Freeman and Carchedi (eds.)［1996］pp. 1-28.

――［1996b］“Price, Value and Profit : A Continuous, General, Treatment.” In Freeman and Carchedi (eds.)［1996］pp. 225-279.

Freeman and Carchedi (eds.)［1996］*Marx and Non-equilibrium Economics*, Cheltenham, Edward Elgar.

Freeman, Kliman, and Wells (eds.)［2004］*The New Value Controversy and the Foundations of Economics*, Cheltenham, Edward Elgar.

Gilibert, G.［2003］“The Equations Unveiled : Sraffa's Price Equations in the Making,” *Contributions to Political Economy*, 22, pp. 27-40.

――［2006］“The Man from the Moon : Sraffa's Upside-down Approach to the Theory of Value,” *Contributions to Political Economy*, 25, pp. 35-48.

Hodgson, G.［1980］“A Theory of Exploitation without the Labor Theory of Value,” *Science & Society*, 44 : 3, pp. 257-273.

Howard, M. C. and J. E. King［1989］*A History of Marxian Economics, Volume I, 1883-1929*, Basingstoke, Macmillan（振津純雄訳『マルクス経済学の歴史』上巻，ナカニシヤ出版，1997 年）。

Hollander, S.［2008］*The Economics of Karl Marx : Analysis and Application*, New York, Cambridge University Press.

Kliman, A.［1988］“The Profit Rate under Continuous Technological Change,” *Review of Radical Political Economics*, 20 : 2-3, pp. 283-289.

――［2007］*Reclaiming Marx's “Capital” : A Refutation of the Myth of Inconsistency*, Lanham, Lexington Books.

――［2010］*The Persistent Fall in Profitability Underlying the Current Crisis : New Temporalist Evidence*, New York, Marxist-Humanist Initiative.

Kliman and McGlone［1988］“The Transformation non-Problem and the non-Transformation Problem,” *Capital and Class*, 35, pp. 56-83.

――［1999］“A Temporal Single-system Interpretation of Marx's Value Theory,” *Review of Political Economy*, 11 : 1, pp. 33-59.

Mandel, E. and A. Freeman (eds.)［1984］*Ricardo,*

Marx and Sraffa: The Langston Memorial Volume, London, Verso.

Marx, K. [1962] *Das Kapital*, Erster Band, Berlin: Dietz Verlag（岡崎次郎訳『資本論』第1分冊-第3分冊，国民文庫，1972年）。

—— [1963] *Das Kapital*, Zweiter Band, Berlin: Dietz Verlag（岡崎次郎訳『資本論』第4分冊-第5分冊，国民文庫，1972年）。

—— [1964] *Das Kapital*, Dritter Band, Berlin: Dietz Verlag（岡崎次郎訳『資本論』第6分冊-第8分冊，国民文庫，1972年）。

—— [1965-68] *Theorien über den Mehrwert: Vierter Band des „Kapitals"*, Berlin, Dietz Verlag（岡崎次郎・時永淑訳『剰余価値学説史（『資本論』第四巻）』第1分冊-第9分冊，国民文庫，1970-1971年）。

Morishima, M. [1973] *Marx's Economics: A Dual Theory of Value and Growth*, Cambridge, Cambridge University Press（高須賀義博訳『マルクスの経済学——価値と成長の二重の理論』東洋経済新報社，1974年）。

—— [1974] "Marx in the Light of Modern Economic Theory," *Econometrica*, 42: 4, pp. 611-632.

Moseley, F. [1993a] "Marx's Logical Method and the "Transformation Problem." In Moseley (ed.) [1993b], pp. 157-183.

—— [2000] "The 'New Solution' to the Transformation Problem: A Sympathetic Critique," *Review of Radical Political Economics*, 32: 2, pp. 282-316.

Moseley, F. (ed.) [1993b] *Marx's Method in Capital: A Reexamination*, Atlantic Highlands, NJ, Humanities Press.

Nakatani, T. [2005] "On the Definition of Values and the Rates of Profit: Simultaneous or Temporal," *Kobe University Economic Review*, 51, pp. 1-9.

Naples, M. [1996] "Time, Money, Equilibrium: Methodology and the Labour Theory of the Profit Rate." In Freeman and Carchedi (eds.) [1996] pp. 95-115.

Okishio, N. [1961] "Technical Changes and the Rate of Profit," *Kobe University Economic Review*, 7, pp. 85-99.

Samuelson, P. [1957] "Wages and Interest: A Modern Dissection of Marxian Economic Models," *American Economic Review*, 47: 6, pp. 884-912.

—— [1971] "Understanding the Marxian Notion of Exploitation: A Summary of the So-Called Transformation Problem Between Marxian Values and Competitive Prices," *Journal of Economic Literature*, 9: 2, pp. 399-431（伊藤誠・櫻井毅・山口重克編訳『論争・転形問題』東京大学出版会，1978年，所収）。

Sen, A. [1978] "On the Labour Theory of Value: Some Methodological Issues," *Cambridge Journal of Economics*, 2, pp. 175-190.

Schumpeter, J. A. [1954] *History of Economic Analysis*, London, Allen & Unwin（東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』上-下巻，岩波書店，2005-2006年）。

Sowell, T. [2006] *On Classical Economics*, New Haven, Yale University Press.

Sraffa, P. [1960] *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to Critique of Economic Theory*, Cambridge, Cambridge University Press（菱山泉・山下博訳『商品による商品の生産——経済理論批判序説』有斐閣，1962年）。

Steedman, I. [1975] "Positive Profit with Negative Surplus Value," *Economic Journal*, 85, pp. 114-123.

—— [1977] *Marx after Sraffa*, London, New Left Books.

Sweezy, P. [1942] *The Theory of Capitalist Development: Principles of Marxian Political Economy*, New York, Oxford University Press（都留重人訳『資本主義発展の理論』新評論，1967年）。

Wolff, R., B. Roberts, and A. Callari [1982] "Marx's (not Ricardo's) 'Transformation Problem': A Radical Reconceptualization," *History of Political Economy*, 14: 4, pp. 564-582.

Wolff, R., A. Callari, and B. Roberts [1984] "A Marxian Alternative to the Traditional 'Transformation Problem'" *Review of Radical Political Economics*, 16: 2-3, pp. 115-135.